

山口栄一編著「JR 福知山線事故の本質 - 企業の社会的責任を科学から考える - 」

NTT 出版株式会社 2007 年 6 月 5 日刊を読む

企業の社会的責任とは何か - 利潤の追求は、企業の目的ではなく結果 -

- 1 . 企業とは何のためにあるのか、その目的について考えるとき、私は、いつも幼いころの記憶を蘇らせる。
- 2 . 私の母は、1970 年 1 月、私が 14 歳のときに 41 歳で亡くなった。だから母の記憶は薄れてしまって思い出せることは、あまりない。それでも一つだけ鮮明に思い出すことがある。
- 3 . 小学 5 年生になって、友だちが行っている塾に自分も通いたいと駄々をこねた日のことだ。母は、その塾についてきて参観をし、その帰りしなに、「この塾は、やめときんしゃい。」ときっぱり言った。
- 4 . なぜなのか。先生は優しそうだし、50 人くらいいる教室の生徒も生き生きとしている。私が悔しくて反論すると、母は、「ここは営利主義たい。」と一言だけつぶやいた。母は、代々続く博多商人の子だったから、月謝と生徒の人数と設備投資の推定値等から、すかさず原価計算をしたのだろう。そして営業利益率をはじき出し、それが異常に高いことを見抜いた。
- 5 . 商売とは、そもそも売り手側がもっている価値をお客様に譲渡し、お客様に満足してもらう営為に他ならない。お客様は、その満足に対してお金を払う。だから儲けることは、商売の目的ではない。儲かること、それは商売の結果なのだ。
- 6 . 今から考えると、母はそれを私に教えていたのだと思う。もちろんその価値が、他の誰にも作れないものであれば、営業利益率は高くてもかまわない。たとえば携帯電話のバックライトとして使われている高性能の白色発光ダイオードは、徳島県阿南市の日亜化学が世界で初めて実用化に成功した。そして日亜化学はとても高い営業利益率をはじき出している。グローバルな競争の中で、それでも高い値段をつけてお客様に評価されるということは誇るべきことだ。
- 7 . しかし母は、商人血筋特有の勘によって「この塾は、人を教えることに使命感を見出していな

い」という奥底を見抜いたのだろう。商売とは、その生業なりわいを通じて社会貢献をする一つの「道」であって、その使命感を失えば人々は軽薄な「営利主義」に墮するのだと、彼女は考えていたにちがいない。

8 . この転覆事故のときに、4 両目と 6 両目に乗り合わせていた 2 人の JR 西日本の運転士が救助作業をすることなく職場へ急行していたという事実も、鉄道マンとしての根本的な使命感を失っていたからだと思ふ。実際に運転士の 1 人は、勤務地の電車区に携帯電話をかけ、当直の指示を受けたので事故現場を離れたという。運転士のみならずデスク・ワークの職員もまた、鉄道業としての使命感を喪失し、目の前の業務にその心を支配されていたということになる。

P174 ~ 176

[コメント]

CSR(Corporate Social Responsibility)、企業の社会的責任を考えると避けることができないのが、JR 福知山線の事故の本質とは何かだ。被害者と科学者が本音で迫る企業の社会的使命とは何かは胸に迫るものがある。

- 2010 年 9 月 15 日 林 明夫記 -